

日本語表現にとって「やさしい日本語」が持つ意味¹

庵 功雄

要旨

本稿では、「やさしい日本語」の全体像を概観し、「やさしい日本語」がマジョリティの日本語母語話者にとって持つ意味を日本語表現との関連で論じた。「やさしい日本語」使用が日本語母語話者の日本語能力を下げるという批判に対し、そうした批判の背景にある「難しさへの信仰」という心的傾向と、日本語母語話者の日本語能力向上のためにそうした信仰を捨て自らの考えを論理的に表現できることを評価する方向に日本社会が変わる必要性を述べた。そうした方向性は特に専門家が非専門家に説明する場合に必要である。専門家が日本語母語話者ならわかる日本語で説明できるようになった場合、それを中間言語としての「やさしい日本語」(plain Japanese)と呼び、これまでの「やさしい日本語」(easy Japanese)と区別する必要がある。また、今後の日本社会で日本語が「国際英語」に対応する「国際日本語」に変容する可能性も考察した。

キーワード マジョリティにとっての「やさしい日本語」、日本語表現の改新、難しさへの信仰、専門家から非専門家への情報提供、国際日本語

1. はじめに—「やさしい日本語」を支える理念—

本稿では、「やさしい日本語」研究がマジョリティである日本語母語話者にとって持つ意味について、日本語表現の改新という観点を中心に論じるが、本節では、「やさしい日本語」研究が依拠する近未来の日本社会像について論じる。

1.1 日本の人口減少とその影響

国立社会保障・人口問題研究所の将来推計（2017年推定）によると、2050年には日本の人口は2020年に比べて約2340万人減少するとされている（出生中位・死亡中位推計）。しかも、人口全体が同じように減少するのではなく、高齢者の人口はほとんど変わらず、減少するのは生産年齢人口（15～64歳）とそれ以下の子どもである²。

こうした人口減少の影響は、地方では税収の減少にともなうバスなどの公共サービスの廃止、都市部では人手不足といった形で現れてきている（2020年以降のコロナ禍で人手不足の問題は一時的に沈静化するかもしれないが、日本経済がコロナ禍以前の水準に回復すれば、同様の問題が再浮上することは明らかである）。2019年4月の入管法の改正（「特定技能」ビザの新設）はこうした流れを受けたものであり、（日本政府は「移民」ということばを使っていないも

¹ 本稿は、2018年6月17日に第20回日本言語政策学会で行った口頭発表、2020年1月14日に朝日新聞東京本社で行った講演、一橋大学、台湾東呉大学、津田塾大学で行った授業の内容などに基づくものである。これらの場所で有益なコメントをくださった方々に心から感謝いたします。

² http://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp29_gaiyou.pdf。以下、本稿で引用するURLの最終閲覧日は2021年2月11日である。

のの) 日本は事実上「移民」受け入れに舵を切ったと言えるが、その際に考えるべきは、外国人を受け入れるとはどのようなことであるべきかということである。

1.2 外国人受け入れ政策はどのようなものであるべきか

人口減少にともなって外国人の受け入れが不可避というのは、それだけでは正しいとは言えない。なぜなら、それだけでは外国人を「数あわせ」のための道具としてしか考えていないことになるためである。移民関係の文献でよく引用されるものに、「我々は労働力を呼んだが、やってきたのは人間だった」というスイスの作家マックス・フリッシュのことばがある。これは外国人を「労働力」としてのみ利用しようとする考え方を露骨に示したもののだが、現在の外国人受け入れも、現状のままでは、こうした欧米の 50 年前の失敗の後追いになる危険性が高い。

こうした「失敗」は単に人道的に問題であるだけではない。それと同様に問題なのは、そのような受け入れの仕方では、外国人の数が増えたとしても、そうした外国人は低賃金で働くだけで、実質的な納税者（タックス・ペイヤー）を増やすことにはならず、地方が抱える上記の負のスパイラルの改善にはつながらないということである。また、日本全体について考えても、タックス・ペイヤーを増やせなければ、現状の膨大な財政赤字を改善することはできず、いずれ日本の財政が危機的状態を迎えることは避けがたい³。

1.3 「30 年後の日本」と「やさしい日本語」

以上を踏まえると、外国人の受け入れは、30 年後の日本を、「日本人」と「外国人」がともに作っていくという理念のもとに行われなければならないと言える。つまり、「日本人」か「外国人」かという国籍の問題ではなく、日本に在住する人間が対等に活躍する場が保障されて生活し、その結果として、税金や社会保障の問題点が改善される社会を目指すということである。

「やさしい日本語」は、こうした社会を、近未来の日本における理想の多文化共生社会（sustainable multicultural society. Cf. Iori 2016）と見なし、その実現にことば（日本語）の問題を通して貢献することを目指すものである。

2. 「やさしい日本語」研究の現状

本節では、「やさしい日本語」研究の現状についてごく簡単に概観する。より詳しくは、庵（2016）、庵編（2020 第 1 部）などを参照されたい。「やさしい日本語」の取り組みは、マイノリティのためのものとマジョリティにとってのものに大別される。

2.1 マイノリティのための「やさしい日本語」

マイノリティのための「やさしい日本語」は、主に成人の外国人を対象とする「居場所作り」のための「やさしい日本語」と、外国にルーツを持つ子どもやろう児を対象とする「バイパス」としての「やさしい日本語」に大別される。

³ 日本の 2021 年度予算案では、歳出は約 106.6 兆円だが、そのうち、借金（国債）の利払いに当たる国債費は約 23.7 兆円で歳出全体の 22.3%に当たる。人口減少にともない、今後この割合がさらに高まる（すなわち、後の世代が自由に使える金額が大きく減少する）ことが懸念される。

2.2 居場所作りのための「やさしい日本語」とバイパスとしての「やさしい日本語」

「居場所作りのための「やさしい日本語」」は、定住外国人が「母語でなら言えることを日本語でも言える」ことを中心的な目標としており、そこには、1) 初期日本語教育の公的保障の対象としての「やさしい日本語」、2) 地域社会の共通言語としての「やさしい日本語」、3) 地域型初級としての「やさしい日本語」という3つの側面がある。

このうち、2) の「地域社会の共通言語としての「やさしい日本語」」について少し説明する。

定住外国人が増えるということは、地域社会に彼／彼女たちが生活するようになるということである。そこには、何らかの共通言語必要となるが、岩田（2010）その他の研究結果から、英語がその役には立たないことが明らかになっている。

第二の候補は日本語母語話者が何の調整も加えない日本語だが、これも不可である。それは、こうした立場を採ることは、外国人を語学能力だけで判断することを意味し、「多文化共生」という考え方に合致しないからである（このことは、日本語母語話者が何らかの理由で海外で生活しなければならなくなった際に、自らの能力をその国のことばができるかどうかだけで判断されたらどのように感じるかを考えてみれば明らかである）。

そうすると、論理的に考えて、地域社会の共通言語が生まれるとすれば、それは、日本語母語話者が一定の調整を加えた日本語、すなわち、「やさしい日本語」しかあり得ないことになる。共通言語が生まれる場合のモデルは以下になる。

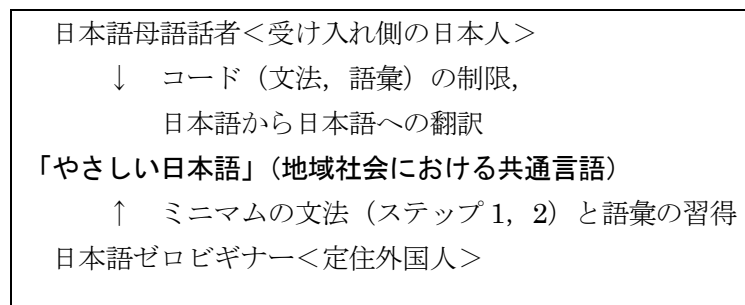


図1 地域社会の共通言語と「やさしい日本語」

ただし、これは、共通言語ができるとすれば、の話であり、それは勝手にそうなるというものではない。このモデルが実現するかどうかは日本語母語話者の意識次第なのである。

ここで、上記の1)～3)は、相互に関連しており、全体として、外国人受け入れにおける社会的コストを下げる効果が期待される（Iori 2019）。

一方、「バイパスとしての「やさしい日本語」」は、外国にルーツを持つ子どもやろう児が第二言語として日本語を習得する際の支援を目的としており、文法シラバスや漢字シラバスの改変を目指している（庵 2015a, 安東・岡 2019, 庵・早川 2017, 早川・本多・庵 2019etc.）。

3. マジョリティにとっての「やさしい日本語」

前節で述べたのは、マイノリティのための「やさしい日本語」ということであるが、「やさしい日本語」はマジョリティである日本語母語話者にとっても重要な意味を持つ。この点については、庵（2015b）などでも論じたが、本稿では、それとは別の観点から論じる。

3.1 「やさしい日本語」の普及とマジョリティにとってのインセンティブ

マジョリティにとっての「やさしい日本語」を考える必要がある理由の1つは、「やさしい日本語」の理念を普及する上で、マジョリティの理解が不可欠なためである。例えば、2.2 節の「地域社会の共通言語」について言えば、「やさしい日本語」が共通言語になるには、日本語母語話者の自発的な日本語の調整が必要であるし、外国にルーツを持つ子どもの教育支援に予算が支出されるには、地方自治体における議会の承認が必要となる⁴。こうした点から、「やさしい日本語」がマジョリティにとって持つインセンティブ（動機付け）が重要になるのである。

3.2 日本語表現の鏡としての「やさしい日本語」

日本語母語話者にとっての第一のインセンティブは、「やさしい日本語」を使うことが日本語母語話者の日本語能力を高めるということである（庵 2015b）。

日本語母語話者にとって、日本語を用いて行う最も重要な言語活動は「自分（だけ）が知っていることを相手に伝えて、相手を自分の考えに同意させる」ことと考えられる（これは、日本語に限ったことではないと考えられるが、ここでは日本語に限定して考える）。これは、アカデミックな世界では「論文」や「口頭発表」、企業では「就職面接」や「商談」、日常生活では「自治会の活動」などに当たるが、日本の学校教育では、「意見文」「感想文」などの形で自らの意見を述べる活動は盛んに行われているものの、相手とのインターアクションの中で、相手の意見を受け入れつつ、自らの意見を相手に認めさせるという活動はあまり行われていない。

外国人を相手に「ロールプレイ」の形で、こうした活動の練習を行うことは、こうした能力を磨く上で役立つ。それは、日本語母語話者同士では、言語自体で相手を説得できたのか否かがはっきりしないのに対し、外国人はわからないところはっきり指摘するため、ロールプレイの真正性（authenticity）が高まるからである（cf. 庵編 2020：第3部）。そして、こうしたことは、「やさしい日本語」が「日本語表現の鏡」として、コミュニケーション力を高める役割を担いうること、および、日本語母語話者にとっての「やさしい日本語」の意義を示している。

3.3 日本語表現にとって「やさしい日本語」が持つ意味

以上の点については、これまでの拙論などでその内容を論じてきたものであるが、本稿では、それらとは別の観点、すなわち、これから求められる日本語表現と「やさしい日本語」の関係という観点から、マジョリティにとって「やさしい日本語」が持つ意味について論じる。

4. 「難しさへの信仰」とその弊害

本節では、日本語母語話者の意識に内在する「難しさへの信仰」と呼ぶべき心的傾向の存在と、その弊害について論じる。

4.1 「やさしい日本語」の使用は日本語表現にとって有害か

2018年6月8日のTBSテレビ「ひるおび!」で、「やさしい日本語」が取り上げられた。

⁴ 相対的貧困率の高さなどの反映として、日本語母語話者の子どもの教育支援も重要な課題となっている（阿部 2008, 2014）ことなども考慮する必要がある。

災害時などにおける「やさしい日本語」の効用が紹介された後、落語家でコメンテーターの立川志らく氏が以下のようにコメントした。

- (1) 震災の時は確かにそうなんですが、他のことはね〜。お年寄りや子供にと言われると、「紅葉」という言葉を覚えさせたいのに、全部こんな風に説明すると日本人全体がちょっとバカになったような気がします（スタジオ笑）。

やっぱり難しい言葉もやっぱり大事だから。そりゃ、公共の場所で外国人のためにというのはわかります。でも日本人のためには、「押印」って何って子供に聞かれたら、「ハンコを押すことだよ」とおしえることも教育だから、全部こうなってくると子供は難しい言葉を覚えなくなってしまう。外国人のためばかり考えたりするのがやさしさじゃなくって、こんなこと言っているともものすごい保守の人のみたいになるけど、日本だから、日本人のためのことも、ちょっと考えてほしいですね⁵。（下線庵）

「やさしい日本語」に対するこうした批判に内在する問題点を以下で検討したい。

4.2 難しさへの信仰

(1) の言明には、日本人（本稿では「日本語母語話者」であっても日本国籍ではない人を「日本人」から外して考える）の中にある「難しさへの信仰」のようなものが透けて見える。例えば、役所のことは漢語を使って書かなければ「それらしくない」といった感覚が発信側には言うまでもなく、受信側にも潜在的にあるのではないだろうか。公的文書が易しくならない一因にこうした読み手の心理が働いているように思われる（岩田 2016 参照）。

4.3 日本語は非論理的な言語ではない

一方、4.2 節の裏返しのような言明もある。

三輪（2005）は、日本語は主語を明示しないから「非論理的」であり、「一人称二人称が現在のままではまともな議論は成り立ちにくい」などと述べている。しかし、1, 2 人称を明示するのは（現代）英語やフランス語などの特徴に過ぎず、現代英語の場合は事実上活用がなくなったため、フランス語は活用はあるものの発音が同形になっている部分が多いため、主語を明示しなければならなくなったに過ぎず、そうした条件がないイタリア語やスペイン語、さらには、ラテン語などでは主語を明示の方が極めて有標である。この他にも、三輪（2005）には言語学（日本語学）に関する無知に由来する問題点が数多く存在する（庵 2013d。三上 1963 も参照）。すなわち、適切な言明は「日本語は非論理的な言語ではない」ということである。

三輪（2005）のような言語学的にはナンセンスと言わざるを得ない言明がまかり通る背景には、「われわれが論理的な言語運用ができないのは日本語がそうした表現に向かない言語だからだ」といった言い逃れをしようとする日本人の心理が働いているように思われる。

なお、この言明は「日本人の言語運用は論理的である」ということを主張しているわけでは

⁵ 「「やさしい日本語」には誤解という落とし穴」

http://www.nihongoplat.org/2018/06/12/yasasii_nihongo-3/（2021 年 2 月 11 日現在リンク切れ）

ない。日本語が論理的な言明に適した言語であっても、その使い手が論理的な言語運用の仕方を身につけていなければ、生み出される日本語のテキストが非論理的になるのは当然である。

4.4 「難しさへの信仰」の「罪」

このように、日本人の意識の中の「難しさへの信仰」が日本語のテキストを不必要に難解にしている部分がある。これは、外国人だけでなく、日本人にとっても問題になることがある。

例えば、医療における患者に対する説明（インフォームドコンセント）である。これは重要なことだが、依然十分に行われているとは言えない状況がある。例えば、どのような検査を何のために行うのか、その検査を行わなければならない理由と検査に伴うリスク、といったことについて十分な説明が行われることは少ないが、そうしたことが外国人にとって不安や医師への不信につながることもある（羽富 2021 近刊）⁶。

こうした問題は、ガンの告知のような患者の人生に重要な影響を持つ場合にはより顕在化する。このような場合には、日本人と外国人の違いに関係なく、「わかりやすい説明」が求められるが、難解な専門用語を振りかざすだけでは、患者の心の不安は取り除けない。

同様の問題に法廷通訳の問題がある。自分がどのような容疑で逮捕され、取調中や公判中に何を尋ねられているのか、自分の主張が正確に翻訳されているのか、といった問題は日本で裁判にかけられる外国人にとっては極めて重要な問題であるが、もとの法律文などは一般の日本語母語話者にとっても難解であり、それが正確に外国語に翻訳されているかには不安が残る。

5. これから求められる日本語表現と「やさしい日本語」

以上の考察を受けて、本節では、今後、多言語多文化化する（べき）日本社会において求められる日本語表現と「やさしい日本語」の関係について考える。

5.1 「難しさへの信仰」からの脱却を目指して

これからの日本語表現を考える上で重要なのは「難しさへの信仰」を捨てることと考えられる。確かに、文学や伝統芸能などのように、言語表現自体に価値があるものについては、必ずしも「やさしさ」「わかりやすさ」を指標とする必要はないと言える。しかし、一般の日本語母語話者に求められるのは、小説を書く能力ではなく、自らの考えを筋道立てて読み手（聞き手）に伝えられる能力である。そうした能力を高めるには、日本社会全体が、日本語による言語表現を評価する際に、「難しさへの信仰」を捨て、わかりやすさを基準にすることが必要である。

このことは、単に日本語による言語表現の問題にとどまらず、英語での情報発信の問題にも直結する。なぜなら、日本語で論理的に読み手を説得できるように書くことができれば、それを英語に翻訳したものも説得的になるが、日本語で論理的に書けない（話せない）日本語母語話者が英語で論理的に書ける（話せる）可能性は極めて低いからである。

⁶ 「インフォームドコンセント」に関しては、英語（などの外国語）で説明ができるかが重要と思われるかもしれないが、重要なのは、「日本語でわかりやすく」説明できるかである。なぜなら、後述のように、医師の説明が一般の日本語母語話者にとってわかりやすければ、通訳を介して正確に情報を伝えられるが、日本語でわかりやすく伝えられない人が英語で説明しても、その説明が英語母語話者（や英語がわかる外国人）にとってわかりやすくなるとは考えにくいからである。

5.2 専門家から非専門家への情報提供のあり方

前小節で述べた内容を敷衍すると次のようになる。

行政文書、インフォームドコンセント、法廷通訳に共通するのは、専門家が非専門家に情報を伝えるという点である。専門家が専門家同士で話す場合には、専門用語を（ふんだんに）使って話しても問題はない。その方が曖昧性が排除されて好ましいということも多いと思われる。

問題は、専門家が非専門家に話す場合でも同じやり方でよいかということである。同じやり方の方がいいというのが「難しさへの信仰」の意味であると考えられるが、日本語の表現力を高めるためには、そうした信仰は捨てるべきという結論になった。とすれば、これからは、専門家が非専門家に情報や知識を伝える際には、「わかりやすさ」を基準に考える必要がある。そのようなパラダイムシフトを起こす必要があるのである⁷。

そうした変化はすでに上記のそれぞれの場で起こりつつある。

行政文書については、横浜市など「やさしい日本語」での情報提供を行っている自治体はかなりの数になる⁸。また、医療現場でも、患者とその家族に十分配慮した病状説明の実践が積み重ねられてきている（天野 2020）。さらに、法廷でも、裁判員制度の普及につれて、非専門家である裁判員への情報提供を意識した言語行動の変化が見られるとされる（清永 2019）。

もちろん、インフォームドコンセントだけをとっても、まだ不十分な点は多いと言えるが（羽富 2021 近刊参照）、以前のように「知らしむべからず、由らしむべし」といった態度を専門家がとり続けられる時代でなくなっているのも明らかな事実なのである。

5.3 もう1つの「やさしい日本語」

前小節の内容から、「やさしい日本語」には次のように 2 つの種類が存在することがわかる（この点について詳しくは庵 2021 近刊参照）。

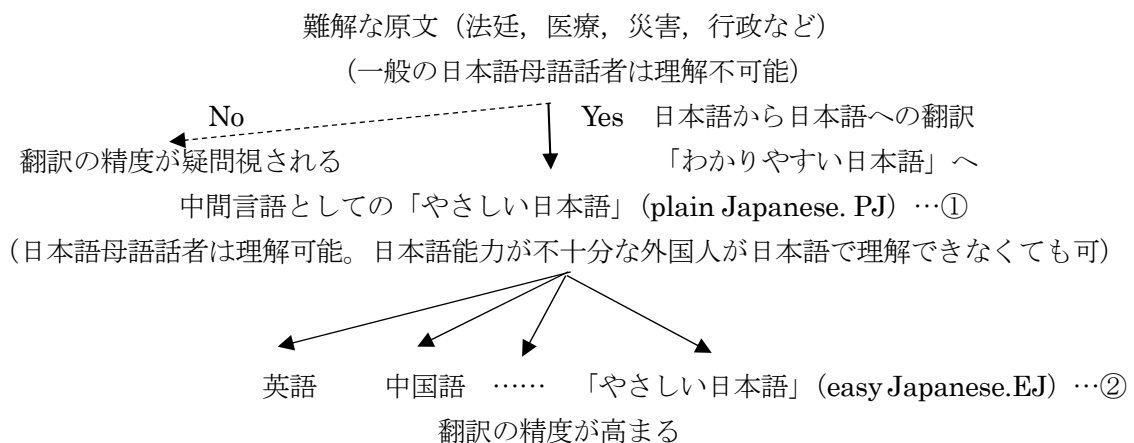


図2 中間言語としての「やさしい日本語」

⁷ 研究者が自らの研究内容を一般の読者に伝える場合もこれらと同じ文脈で考えるべきであろう。

⁸ そうした現状を踏まえ、2020年8月には出入国在留管理庁と文化庁から「在留支援のための「やさしい日本語」ガイドライン」が公表された。

http://www.moj.go.jp/isa/support/portal/plainjapanese_guideline.html

上述の行政、医療、司法などにおいては、原文が一般の日本語母語話者にとっても難解である場合が多い。そうした原文をそのまま翻訳しようとする、誤解が生じる可能性が高くなる。第一段階として必要なのは、そうした難解な原文を一般の日本語母語話者なら理解できるレベルに、専門家が言い換える（場合によっては書き換える）ことである。

このようにして、言い換え（書き換え）られた一般の日本語母語話者が理解できるレベルの日本語表現を「中間言語としての「やさしい日本語」」と呼ぶことにする（図2の①）⁹。このレベルに変換することには少なくとも2つのメリットがある。

第一のメリットは、日本語母語話者にとって、これらの専門概念が理解可能になることである。これにより、例えば、がん患者などが自らの余命を正確に理解することができるようになる。れば、患者自身のQOL（Quality of Life）を高めることができるようになる。

第二のメリットは、このように変換され、日本語の難易度が下がることで、それまでだと、基本的に、日本語母語話者で当該の言語がわかる人しか翻訳（通訳）をすることができなかったのが、当該の言語の母語話者で日本語能力が中上級レベルの人でも翻訳（通訳）が可能になり、翻訳（通訳）に携われる人の数が大きく増えることが期待される¹⁰。

こうした「中間言語としての「やさしい日本語」」ができた場合、一定以上の日本語能力を持つ非日本語母語話者はそちらで情報を取ればよいが、それが不可能な非母語話者に対しては、これまでと同様の意味の「やさしい日本語」（図2の②）⁹への翻訳も必要である。ここで、この意味の「やさしい日本語」は、図2からもわかるように、英語や中国語などの外国語と同様の翻訳対象言語であることに注意されたい。この意味で、「やさしい日本語」による対応と多言語対応は決して排反的な関係にあるものではないのである。

5.4 新聞改造プロジェクト

これからの日本語表現を考える際に、考えるべきものとして、「マスコミのことば」がある。現在、新聞の購読者数は減少している¹¹。その背景に「活字離れ」があるのは事実だろうが、新聞のスタイル自体の問題もあるように思われる。ここでは、日本語表現の観点から新聞のスタイルについて少し考えてみたい。

5.4.1 19歳警官は「罵倒された」から撃ったのか？

2018年4月に滋賀県彦根市で19歳の警官が同僚警官を射殺する事件が起きた。その際の新聞記事の見出しには「罵倒されたので撃った」（産経新聞2019.4.12）と書かれていた¹²。

しかし、おそらく地元出身で、普段は方言を使っていたと思われる19歳の若者が「罵倒」ということばを発したのだろうか。おそらくそうではないと思われる。そうした現実にあるかもしれない発話を「直接引用として」見出しにすることに違和感を持たないだろうか。これから示

⁹ 英語にする際は、図2の①に当たる「中間言語としての「やさしい日本語」」を plain Japanese (PJ)、図2の②に当たる「やさしい日本語」を easy Japanese (EJ) と称することにする。

¹⁰ 外国語への翻訳は機械翻訳に任せればよいと考えられるかもしれないが、実際には機械翻訳にはまだ多くの課題があり（庵2020b参照）、当面は人手による翻訳が必要であると考えられる。

¹¹ <https://news.yahoo.co.jp/byline/fuwaraizo/20191003-00145036>

¹² <https://www.sankei.com/west/news/180412/wst1804120036-n1.html>

唆されるのは、現在の新聞記事が「型にはまっている」ということである。

5.4.2 新聞報道に求めたいこと

以上のような問題意識のもと、筆者は東京新聞との協働で紙面改造に取り組んだことがある（東京新聞 2018.6.7 朝刊 30 面）。このプロジェクトでは、「イラク日報」関連の事件の記事を取り上げた。事件の概要は、幹部自衛官が、ジョギング中のイラク日報事件に批判的な言動をしていた野党議員に暴言を吐いたというものである。

「改造前」の記事のリード文を読んでも、自衛官がなぜ暴言を吐いたのかはよくわからない。ただし、そのわからなさは上記の事件において 19 歳の警官が発砲した理由がわからないというのとは質が異なり、イラク日報事件の記事をフォローしている読者にはその理由は自明であるはずである。つまり、発砲の理由が、記者にも読者にも不明であるのとは異なり、暴言の理由は、記者と「通^{つう}の」読者にはわかるが、「一見^{いちげん}の」読者にはわからないのである。

若い読者の新規参入を狙うのなら、こうした「通向けの」書き方を改めていく必要がある。では、そのためにはどのような表現が求められるのだろうか。東京新聞における実験（大学生に改造前と改造後の記事を読んでもらって感想を聞く）を踏まえて、考えてみたい。

- (2) a. 横書き
- b. 時系列に沿って書く
- c. 定型表現を使わない

(2a) について。筆者自身もそうだが、若い人の場合、現在、新聞を読むとしても、電子版が中心だと思われる。筆者が教えている留学生のうち、上級の学生でも、縦書きは（極めて）読みづらいと言う人が多い。日本語母語話者の場合、漢字の問題はそれほど重大ではなく、縦書きにもある程度は慣れているとしても、新聞を紙で読む習慣は大きく減ってきているのだから、それでも紙媒体を残そうとするのなら、横書きの導入が必要であると思われる。

(2b) について。新聞の文体の特徴の 1 つに、特に連続した事件の場合、前の報道内容を読者が知っていることを前提とした書き方をすることが挙げられる。

- (3) 13 日午後 3 時ごろ、〇〇駅前のビルで火事がありました。
- (4) 13 日に〇〇駅前で起こったビルの火事で、入院中の 1 名が亡くなりました。
- (5) この前のあれだけど、どうなってる？

例えば、火事の第一報は (3) のように書かれるが、(3) が夕刊の記事の場合、翌日の朝刊で (4) のような書き方がされることがよくある。(4) の書き方の場合、読み手からすると、情報への接し方が (5) のような話しかけられ方の場合と同様になっている。言い換えると、こうした記事は読者が「火事」について前提知識を持っていることを頼りに書かれていることになる。

こうした書き方は、新聞に慣れている人、毎日その新聞を読んでいる人にとっては「空気」のようなもので、問題を感じないが、ある意味で「仲間内」の書き方であり、新しい読者が「新

規参入」することは難しい。

(2c) について。新聞では「定型表現」が多用される。それらは新聞の文体を作っているものでもあるが、そうした表現に寄りかかることが 5.4.1 節の見出し(「罵倒されたから撃った」)に見られるような「悪しき定型性」の温床になっている可能性がある。まずは、そうした定型表現を使わずに同じ内容を表現できないかと考えてみる必要があるように思われる。

6. 国際日本語としての「やさしい日本語」

日本語表現にとっての「やさしい日本語」の意味を考える上で、日本語の変容も重要な論点である。政府が外国人受け入れの方向に大きく舵を切ったことで、今後、多言語多文化社会に向かっていく可能性が高い日本国内において、日本語と様々な外国語が接触することになることが予想される。こうした言語接触 (language contact) の中で、日本語も変容していくと思われるが、本節ではそのことについて考える。

6.1 国際語としての英語

現代英語は国際語としての不動の地位を築いている。その背景に、イギリス、アメリカの政治的、経済的、軍事的影響力があることは言うまでもないが、英語自体の特徴による部分も少なくないと考えられる。

世界の言語を広い視野から比較する類型論 (typology) の第一人者である角田太作氏は角田 (2009) の中で、「日本語は特殊ではない。しかし、英語は特殊だ」と述べている。このように、現代英語は近隣のヨーロッパ言語に比べて、文法的には極めて単純化されており、そのことが英語が国際語として普及する上で重要な役割を果たしてきたと言える。

もう 1 つの重要な要件は、「英語はもはや母語話者のものではない」ということである。図 3 は Nerrière and Hon (2009) に基づくが、これからも英語が母語話者のものではなくなっていくことがわかる。Globish, Englishes といった言い方にもこの点がよく現れている。

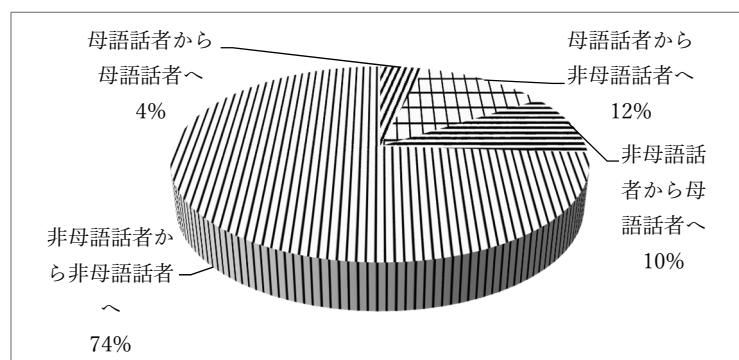


図 3 英語の現在 (Nerrière and Hon 2009)

6.2 日本語は 1 つではない—「公平な耳」の重要性—

こうした英語の現状は、日本語のこれからを考える上で示唆的である。

土岐 (1994) は、外国人の日本語に対する評価が、その人の能力に対する評価に直結する危険性を指摘している。

- (6) 日本の大手自動車会社の工場長がタイからの技術研修生に会った時、「わたし…じどうチャ…」などと話しているのを聞いて、引率の日本人に、この人達はほんとうに仕事ができるのか」と心配そうに言ったというが、これなどは、「わたし」や「じどうチャ」などという発音の仕方が、日本語では幼児の話し方に似ているところから、勝手に人格や能力の判断にまで結び付けて出された反応であったとまずは解釈できよう。

(土岐 1994)

これと同様の差別は方言話者に対しても行われてきた。

江戸時代は言語的に多様な時代であり、そのことは「訛りは国の手形」ということわざに反映している。これに対し、明治に入ると、中央集権化が急速に進められた。ことばもその1つで、「方言」を排し、「標準語」を話すことが求められた¹³。

その過程で、「方言札」が使用されることもあったとされる(井谷 2006)。また、地方出身者に対する差別は戦後も続いた(毎日新聞地方部特報版 1998, 庵 2013a)。

現在、方言に対する差別意識はなくなったとされ、大阪方言などは一定以上のステータスを占めているように見えるが¹⁴、メディアでの扱いなどから考えて、それは虚構であるように思われる(例えば、以下の URL の投稿¹⁵を参照)。

このように、「日本語」といっても決して1つではなく、方言話者の日本語もあれば、外国人が話す日本語もある。そうした点を踏まえて、土岐(1994)は、様々な日本語を全て日本語のバリエーションとして聞くことができる「公平な耳」を持つことの重要性を説いている¹⁶。

戦前までの「標準語」を規範として「方言」を排除するという考え方が誤りだとすれば、かつ、現在の日本語母語話者の大部分が「共通語」と「方言」のバイリンガルであるとすれば、ある意味で、「日本語母語話者」という言い方自体が一種のフィクションであるとも言える。

これは極論だとしても、現実の日本語(共通語)は様々な方言を背後に背負った「方言の影響を受けた共通語」の集合体であることは間違いない。そうであるとすれば、上述の「公平な耳」(土岐 1994)を身につけることに努めることで、様々な日本語が日本の中で共存していくことになるはずであり、そこから Japanese のような状況が生まれてくる可能性もある。

6.3 「節英」から見た「やさしい日本語」

前節で見たような問題を考える上で、木村(2016)の「節英」という考え方が役に立つ。

木村(2016)は、社会の安全性や持続可能性を守る観点から(特に福島原発事故以降)「節電」が必要とされるのと並行的な意味で、過度の英語依存がもたらす弊害(例えば、世界を英米人の観点からのみ見てしまうこと)を指摘し、「自分の英語使用がどのような意味を持つかを自覚して、節度を持って使うこと」としての「節英」のすすめを説いている。

¹³ 明治時代を通して、江戸山の手ことばを中心に標準語が作られた(真田 1991, 井上 2002)。

¹⁴ ただし、こうした状況はごく最近の現象である(金水 2003 参照)。

¹⁵ 「私が方言を話さない理由」<https://twitter.com/88888888mamy/status/978075373383462912>

¹⁶ 「公平な耳」を持つことは容易なことではないので、学校教育においてこうした考え方を導入することが重要であると土岐(1994)は述べている(庵 2013c も参照)。

6.3.1 「民族英語」と「国際英語」

同書では、英語を、英米人の文化と結びつけた「民族英語（ネイティブ英語）」と、そうした母語話者の手を離れた「国際英語」とに分け、日本人が学ぶべきは後者であることを指摘している。その上で、「節英」の観点からは、そうした「国際英語」よりも、「現地語」を使うことが望ましいとしている¹⁷。

6.3.2 「節英」と「やさしい日本語」

その上で、同書では、日本語についても、「節英」の観点を拡張して、「相手の日本語力に配慮する」ことが重要で、その結果として、日本語自体が「やさしい日本語」に変容することが想定されるとしている（木村 2016 : 237）。

6.4 「国際日本語」としての「やさしい日本語」

木村（2016）の主張をまとめると、「民族英語」に対応する「民族日本語」ではなく、「国際英語」に対応する「国際日本語」を構想すべきであり、そのときの最も有力な候補は「やさしい日本語」であるということになる。

この木村（2016）の指摘を先取りしたような指摘が田中（1989）にある。そこで田中氏は、梅棹忠夫氏の言う「おぞましい日本語」を評価し、日本語が「大^{コンチネンタル}陸日本語」となるには「かわいい日本語に旅をさせる」ことが必要だと説いている。時代の制約もあり、用語には問題があるが、次の田中氏の指摘は木村氏の指摘を先取りしたものとして今なお傾聴すべきものであると考えられる。

- (7) 人は誰でも、自分がよりよく受け入れられ、よりよく理解されようとして、まずしくとも知力のかぎりをつくしながらことばを使っている。この活動は人間の尊厳に属するものであって、決してあざけりの対象にしてはならない。(中略) 真におぞましいのは、自らすすんで相手に理解させる手立てをもちあがって、おぞましきことばすら発することもできずに、一自らのせまい好みによって相手を裁こうとする傲慢な感性の方である。（田中 1989 : 43。下線庵）

7. おわりに

本稿では、マジョリティにとっての「やさしい日本語」のうち、日本語表現にとって「やさしい日本語」が持つ意味について考えた。

「やさしい日本語」は日本語を損なうという批判に対し、そこには「難しさへの信仰」といった感情が存在することを指摘し、そうした感情が日本語を論理的に運用することを妨げている可能性を指摘した。

日本語をわかりやすく表現することは日本語の表現能力を高めることにつながる¹⁸。このことが認識されれば、そのための手段として「やさしい日本語」が持つ意味がマジョリティに認

¹⁷ これは EU で提唱されている *subsidiarity* の原則にそくしたものであるとされている。

¹⁸ わかりやすい日本語表現について詳しくは野村・木村編（2016）、野村（2016）も参照。

識されていく道が開ける。

こうした「わかりやすさへの志向」や「公平な耳」といった感覚を日本語母語話者が日本語について普通に持てるようになれば、日本の中に、現在の「国際英語」のような特徴を持つ「国際日本語」が形成されていくだろう。その場合、その「国際日本語」は「やさしい日本語」の特徴を持つはずだが、その時点で、そうした日本語は「無標」になり、その結果（「点字」の反対語が存在しないのと同様の意味で¹⁹）、「やさしい日本語」という概念自体が意味を持たなくなり、「やさしい日本語」ということばも使われなくなるはずである。

参考文献

- 阿部彩（2008）『子どもの貧困』岩波新書。
- 阿部彩（2014）『子どもの貧困Ⅱ』岩波新書。
- 天野雅之（2020）『病状説明』医学書院。
- 安東明珠花・岡典栄（2019）「第16章 ろう児と〈やさしい日本語〉」庵ほか編（2019）pp.257-273.
- 庵功雄（2012）『新しい日本語学入門（第2版）』スリーエーネットワーク。
- 庵功雄（2013a）『日本語教育・日本語学の「次の一手」』くろしお出版。
- 庵功雄（2013b）「「いつか来た道」を繰り返さないために」庵（2013a）pp.88-98.
- 庵功雄（2013c）「「聞き手の国際化」と「やさしい日本語」」庵（2013a）pp.99-104.
- 庵功雄（2013d）「日本語は非論理的な言語か」庵（2013a）pp.141-154.
- 庵功雄（2015a）「日本語学的知見から見た中上級シラバス」庵・山内編（2015）pp.15-46.
- 庵功雄（2015b）「「やさしい日本語」研究が日本語母語話者にとって持つ意義」『一橋大学国際教育センター紀要』6, 一橋大学, pp.3-15.
- 庵功雄（2016）『やさしい日本語』岩波新書。
- 庵功雄（2020a）「32 ことばに潜む差別 昨日診てもらったのは女医さんだった」庵功雄・日高水穂・前田直子・山田敏弘・大和シゲミ『やさしい日本語のしくみ 改訂版』くろしお出版, pp.94-95.
- 庵功雄（2020b）「これからの日本社会と〈やさしい日本語〉」『季刊行政相談』166, 全国行政相談委員連合協議会, pp.39-48.
- 庵功雄（2021 近刊）「2つの「やさしい日本語」」庵編（2021 近刊）ページ数未定.
- 庵功雄・早川杏子（2017）「JSL 生徒対象の漢字教育見直しに関する基礎的研究」『人文・自然研究』11, 一橋大学, pp.4-19.
- 庵功雄編（2020）『「やさしい日本語」表現事典』丸善出版。
- 庵功雄編（2021 近刊）『「やさしい日本語」の関連領域』ココ出版。
- 庵功雄・山内博之編（2015）『データに基づく文法シラバス』くろしお出版。
- 庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美編（2019）『〈やさしい日本語〉と多文化共生』ココ出版。

¹⁹ ものの名付けにおいては、一般的な（無標の unmarked）ものではなく、特殊な（有標の marked）ものが使われるのが普通で、その結果、無標のものには名前がないことが多い。「文字」を「点字」とそれ以外に分けた場合の「点字ではない文字」を「墨字」と言うが、この語は現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）にも実例がないほど、一般にはほとんど知られていない。これも「無標のものには名前がない」ことの例である。また、「女医」という語はあるのに「男医」という語はないといった事象に現れるジェンダーバイアスもこれと同様に説明できる（庵 2012, 2020a 参照）。

- 井谷泰彦 (2006) 『沖縄の方言札』 ボーダーインク.
- 井上ひさし (2002) 『国語元年』 中公文庫.
- 岩田一成 (2010) 「言語サービスにおける英語志向」『社会言語科学』 13-1, 社会言語科学会, pp.84-94.
- 岩田一成 (2016) 『読み手に伝わる公用文』 大修館書店.
- 木村護郎クリストフ (2016) 『節英のすすめ』 萬書房.
- 清永聡 (2019) 「時論公論 裁判員制度 10 年 国民参加の実現は」
(<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/367593.html>)
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店.
- 真田信治 (1991) 『標準語はいかに成立したか』 創拓社.
- 田中克彦 (1989) 「かわいい日本語に旅をさせよ」『国家語をこえて』 筑摩書房, pp.29-44.
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 (改訂版)』 くろしお出版.
- 土岐哲 (1994) 「聞き手の国際化」『日本語学』 13-13, 明治書院, pp.74-80.
- 野村雅昭 (2016) 「わかりやすい日本語とは何か」 野村・木村編 (2016) pp.3-19.
- 野村雅昭・木村義之編 (2016) 『わかりやすい日本語』 くろしお出版.
- 羽富文子 (2021 近刊) 「「見えない隣人」を可視化する試み」 庵編 (2021 近刊) ページ数未定.
- 早川杏子・本多由美子・庵功雄 (2019) 「漢字教育改革のための基礎的研究」『人文・自然研究』 13, 一橋大学, pp.116-131.
- 毎日新聞地方部特報版 (1998) 『東北「方言」ものがたり』 無明舎出版.
- 三上章 (1963) 『日本語の論理』 くろしお出版.
- 三輪正 (2005) 『一人称二人称と対話』 人文書院.
- Iori, Isao (2016) *The enterprise of Yasashii Nihongo: For a sustainable multicultural society.*
『人文・自然研究』 10, 一橋大学, pp.4-19.
- Iori, Isao (2019) *Immigrant Acceptance and "Plain Japanese."* Japan in Their Own Words.
(http://www.esuj.gr.jp/jitow/558_index_detail.php.)
- Nerrière, Jean-Paul and Hon, David (2009) *Globish: The world over.* International Globish Institute.